

二 東アジア国際関係の中の白村江の戦い

五百旗頭 真

はじめに

みなさんこんにちは。立派な、古代についての専門科学者が臨席する中で、私のみ素人でございます。今御紹介いただいたように、私は、近現代史の専門家、特に戦後史と言つてよいかもしれません。それなのにここにお招きいただいたのは、蒲島知事がまだ若い青年であつた頃でしょうか、三三年になると思いますが、ハーバード大学で御一緒した、大変変わった型破りの学者でありました。日本人は、「大局からこれをやらなくてはいけない」というふうに思つても、「いやあ、法律が許さない」「国家戦略局は法的に難しい」とか、細々したことを色々言つて、結局なかなかやらないですね。蒲島さんはそれとは逆のタイプでありまして、「小さな枝葉のことを言つていちゃ、人間だめだ」と、「大きな観点からやるべきことならやろうじゃないか。」そういうので政治学会、日本で初めて「世界政治学会」の大会を福岡で催すリーダーシップを発揮された時に、私も巻き込まれて、御一緒したがございます。日本の政治は、ちまちまするため、一年持たずに次々変わる。

日本国民、誠に可愛そうであります。私は、熊本県民は幸せだと思いますね。こういう知事さんを持たれて幸せだ、というふうに慶賀の至りと思います。

この間、先月、知事自ら私を鞠智城に御案内下さいました。素晴らしい、日本の歴史的な宝物を間近に見ることができました。

歴史家には、二つの素養が必要だと思います。一つは、想像力というのでしょうか。大きな状況を捉え、そして歴史の色々なものの類推から、「これはこうじゃないか」「ああいう可能性もある」というふうに想像力を逞しく、妄想も含まれていても良い、そういうのが一方ではないと面白くないですね。しかし、単に妄想に終わっちゃだめなのです。他方で緻密な実証、厳しい実証。先ほどの笹山先生のような方がきつちりと押さえて、誠に精緻な議論を展開する。そういう両方がないといけないですね。私は、アメリカの日本占領政策だ



写真3 講演中の五百旗頭真氏

とか、専門のところでは精緻なことをやりますが、古代については全く素人です。笹山先生を始め、諸先生からお教えをいただくばかりです。でもそういう先生がすぐに間違いを言えば正してくれますので、安心して今日は、大局からの、妄想を含む、想像を語らせていただきたいと思っています。

私は、知事と会う前から、この時期に無関心ではなかった。なぜ関心を持ったか。皆さん、どう思われますか、日本という国、あるいは日本国民、どの程度のものだと。ムーディーズの格付け、あらゆることやります。国と国民の水準とか、相場とか、日本についてどう思われますか。自分の国のことって、分かりにくいですよ。よその国のことは、だいたいあんな所というのは、分かりませんが、自分のことだとあまりにも胸一杯になりますので、分かりにくいですね。歴史家として、私は、日本人というのは相当なものだと、すごいと思いますね。そんじょそらの、どこにでもあるような国民ではない。と思いますのは、近代西洋が、西洋文明が、特にイギリスで産業革命が起こってから、近代西洋文明が勃興して、これが今までの水準をぶっ飛ばすような、ものすごい、強力な文明になったんですね。それまでの文明は、すべて人力と馬力で動いておりました。ところが、近代西洋文明は、動力を以って地上を走り、海上を走るようになったんですね。その結果、初めて世界文明が可能になったんですね。

それまでは、馬力を上手に使ったモンゴルが地球最大の大陸、ユーラシアを席卷するというエポックメイキングがありましたけれど、それが限界だった。ところが、近代西洋文明は、動力を使つたために、地球全体を支配できるようになる、地球を広し、としなくなったですね。これは、西洋列強にとつてもの、素晴らしい機会で、一九世紀から地球再分割をイギリス・フランスが中心とな

ってやりました。

おめでたい限りですが、かわいそうなのは、非西洋ですね。どんなに素敵な文化文明を持っていたても、力の水準が違う、というので片っ端から潰されて、植民地化されていく。これが非西洋の一九世紀のほとんど宿命としか考えられなかった。だって日本が昔からわが文明の父母と思っていたのは、唐・天竺ですね。中国文明であり、インド文明。そのインドは、すでにイギリスの植民地。中国ですら、イギリスがアヘン戦争で一蹴してしまう。それもイギリスが国の全力を挙げて、中国へ攻めてきたのなら分かりますよ。そうじゃないんですよ。世界中経営していて、その一部である極東艦隊で簡単にやつつけちゃったわけですね。

唐・天竺ですらそうであるとすれば、中国文明の沖合の周辺国である島国、日本などは、小指で弾くように潰れておしまいというのが本来の姿であるはず、と思われました。ところがこの小さな島国、日本はなんとペリーが来てから、私の今いる防衛大学の麓の浦賀・久里浜辺りにペリーがやってきてから、僅か五〇年にして、西洋列強の中の軍事大国、ロシアを撃ち破っちゃうんですね。『坂の上の雲』の時代です。

どうして、唐・天竺ではなくて日本が西洋列強に屈服せずに、並び立つ存在になれたか。列強が互いに牽制しあった、イギリスとフランスが争ってくれたからとか、それから地理的に遠かったからとかね、いろんな要因はありますけれども、しかし、西洋列強と並び立つ存在に日本はなっちゃったですね。こういう芸当が半世紀でできた、というのは、実は日本だけです。西洋文明が革命的に強大な文明であったということを考えると、大変なことなんです。

日本のみがなぜ近代化に成功したのか。それほどの偉業を成し遂げた日本というのは、そんなところら、どこにでもあるものではない。一度昭和二〇年にダウンして、廃墟になって、それからまた猛然と学習して。だいたいそうですね、一九六〇年ぐらゐまで世界の中で近代化を成し遂げて、西洋諸国とあい互してやれたのは、日本だけだったですね。その後、八〇年代、九〇年代に東アジアの奇跡が起こって、ニーズ、アセアン、中国、ベトナムと、日本を先頭とする雁行的発展という、この集団的躍進が東アジアに起こって、その中の巨体である中国が今や東アジアの中心に、アヘン戦争以来一五〇年の断弦をついて戻ろうとしています。

しかし、それまでの間、日本だけが非西洋の中であい互してやってきたのですね。これは大変なことです。なぜ日本だけができたのか、これは日本が、日本人が優秀だからといえればそれでいいですが、私は、それ以外にもあるはずだと。そこで目を着けたのが、この古代の歴史です。素人ながら、明治以後、近代西洋に対して、対応できたのは、すでに外部文明に対する体験があつて、自分より優れた外部文明との間合いの取り方というのを自分の身体の中にすでに持つていたからだ、というふうにいるに至り、その観点から白村江の戦いというのに注目したわけであります。

お手元の冊子の一一ページに、私の話のレジメがございます。それを見ながら聞いていただければと思いますが、幸いにも私は、学者の常として九〇分、一〇〇分授業に慣れておりますので、防大に行つてからは、短い挨拶もするのですけれども、それは五分、一〇分、一五分。しかし、防大生二〇〇〇人に対して毎月一回九〇分の授業をしております。歴史の話をしております。九〇分がしばしば一五分オーバーする実績を考えますと、今日三〇分で話をまとめるといふのは至難の業で

ありますが、幸いにも笹山先生が先ほど非常に精緻なお話を下さったので、その部分をスキップしながら何とか三〇分で収められたらと思っているしだいです。

一 白村江への道——東アジア国際関係の激動

御承知のとおり、漢の武帝が朝鮮を攻略して、楽浪郡を置いた。しかし、後漢が衰退してくると、三一三年に高句麗が楽浪郡を攻略いたしまして、中国による朝鮮支配は終わった。この頃から朝鮮半島は、高句麗・百濟・新羅の三国時代へと入っていく。

日本は四世紀頃から時々出兵いたしまして、任那・伽耶といった地域に影響下に置いたり、あるいは朝鮮半島、三ヶ国が鼎立状態にあるというのは、大変なチャンスなんですね。拮抗しているところに、日本の、外部の力というのがやってきますと、バランスを変える、影響力を行使しやすい。しかもその三ヶ国の間でどれもが決定的な優位がとれませんので、外部要因を味方にしよう、というので日本がもててになるんですね。三ヶ国とも日本の力を味方に付けたら、相手を挟み打ちにできるとか、ということなので、日本はまだ外交的に未熟ではありましたが、現地事情、東北アジアの国際関係を十分掌握したうえで、戦略的な行動がとれたとは到底言えませんが、状況がすごく幸運で、みんなが仲良くしてほしい、味方になってほしいと、もてもて状態で少しいい気になっていたところがあります。

その中でも日本に対して、熱い思いを以って接近してきたのが百濟であります。朝鮮半島の三国

の中で、軍事的には高句麗が断然強いんですね。初め百濟は、ソウルの南岸、漢江の南岸に都を置いていたのですが、高句麗にやられて、南へ逃げ下る。真ん中くらいの、錦江中流の公州、熊津ともいいますが、そこに首都を移して、そこでまた貿易を強みにして、南中国との貿易を上手に活かしながら富を得、また民を愛しんで中興の時代を築いた。五三八年には、さらに同じ錦江の畔ですが、扶余と、泗泚ともいいますが、そちらに都を移した。個性のある、特に南宋との交易をやる貿易国ですので、その中国の最新の文物を日本に持って行くんですね。仏教を含めて。そうすると大和の人がまた大変喜ぶんですね。

このへんが、わが日本の誇るべきところで、好奇心旺盛なんですね。これが最新の仏教の芸術だとか、教えだとかいうことになる、井上靖の小説に『天平の薨』という短編がありますが、素晴らしい作品、鑑真を連れてくる話ですけども、外に素晴らしい文明があるとなると、いてもたってもいられない、眼を輝かせ、東シナ海のもくずになる危険を冒しても、我も我もと次々に出かけ行つて、ついに鑑真さんを連れてくる、という大変楽しいお話ですが、そういう天上の火を持ち帰る営みというのをこの当時、熱心にやったわけですね。

東アジア国際関係が大きく動いたのが、五八九年、隋が中国全上の統一に成功しました。遣隋使を日本も送る。朝鮮半島に対しても、統一された新帝国、隋は、支配を広げようといまして、煬帝は三度高句麗を攻めました。けれども、二度敗退して、三度目は一応格好は着けたというふうな苦戦をいたします。しかし、対外戦争をやりすぎたこともあって、国内がもたなくなつて、隋は短命で崩壊するんですね。

それに代わって六一八年、唐の帝国ができた。今度は、さらにしつかりした帝国ができた。隋よりも強そうだし、拮抗している朝鮮半島の三つの国は、どこも大和ですら味方につけるとその拮抗状態で優位ですから、唐を味方に付ける方がもっと優位ですね。そういうので、三国とも朝貢して、使節を送って冊封を受けました。それで皆仲良くしなさいと、唐は朝鮮の三国に言うんですが、しかし死闘は止まない。

六四二年、百済は新羅を攻めた。この頃、義慈王という王様がなかなか強かったですね、日本で有名な、仏教を持ってきた聖明王は新羅との戦いで戦死いたしますけれども、義慈王は新羅を攻めて四〇の城を奪い取った。百済も、結構強い時があるんですね。

それに対して、新羅は唐に訴えて、百済が高句麗と一緒に私をいじめますと、何とか口利いてくださいと言ったら、「三国和親の詔」というのを唐の皇帝が説教してくれたりするんですが、言葉で済むものではない。

そういう中で、東アジアの動乱、朝鮮半島を中心とした動乱を根本的に変える戦略家が出てまいります。六四五年、唐の太宗、李世民が、高句麗討伐をやるわけですね。その時期に新羅の王族、金春秋が戦略家として東アジアの国際関係を手玉に取るというふうな才能を発揮いたします。彼は新羅の王族として六四二年、高句麗との交渉のために派遣されるんですが、高句麗は昔新羅が取った領土を返せという。金春秋は、NOと断るんですね。それがけしからんと腹を立てたからか、あるいはこの金春秋という人物を生かしておいたら、将来やバイイと思ったのか、逮捕するんですね。交渉者を逮捕して殺そうとするんですね。危なかったんですが、金春秋は、彼は政治外交戦略家で

すが、パートナーとして、金庾信（ゆしん）という將軍、軍事的天才がパートナー、仲間としていたんですね。彼は金春秋を救うために、国境まで軍隊で押し寄せてくるんですね。高句麗は、これはちょっとヤバイと思って、殺そうと思った金春秋を逃がしてやるというので、際どく助かって帰ってきます。

そして五年後に、大和にやってまいります。半年間、大和の王朝の中にいて、大変素晴らしい人だと、学問もあるし、人物も大きいし、もつといつまでもいてくださいと言われるほど、人気を博したんですが、半年たったところで、「お世話になりました」と言って、金春秋は帰っていきます。その足で、彼は、唐へ行くんですね。そして、太宗にも大変知遇を得て、「おれの家来にならないか」と、「いえいえそれよりは、新羅と唐の固い結びつきをお願いしたい」とかなんとか言って、大変良い関係なんです。

何をこの人は忙しく駆け回っていたかというと、東アジアのこの国際関係の中で何が重要なファクターなのか、いろんなアクターがいるけれども、内実はどうなのか、というので、高句麗、そして大和に半年間いて、内部から見るとわかりますよね。ちょっと外から見ただけじゃなくて、そこに入り込んで内在的に理解をする。唐にも一年間いる。そうすることによって、どれほどの力量を持っている、内容を持っているものか、ということをしつかりと見極めたわけですね。

その上で彼は、新羅の国家戦略を打ち出します。それは、東アジア国際関係の中で、決定的ファクターは何か。唐帝国である。唐帝国とどういう係わりを持つことによって、新羅の将来は決まるということを、枝葉を払って、ちゃんと確信するんですね。したがって、唐との同盟こそが大事だ。

しかし、みんな唐の支持を得たいというので、冊封を受けておべんちゃらをするわけですね。そ

れを半端にやってたらだめだ、というので、彼は、新羅の国内を徹底的に唐システム、律令国家の制度で改革するんですね。ものすごい改革をやるんですね。

幸い六五四年には、武烈王と、王様にもなりましたので、大変なリーダーシップを発揮して、その唐モデルでの改革は中途半端じゃなくて、唐の元号を新羅の元号にするという、ひどいおべんちやらというべきことまでやるんですね。元号というのは、その国のものであるはずなのに、唐のものをそのままいただくと。今でいえば、アメリカ民主主義、価値を共有しております、といって操を尽くすようなものでしょうか。そこまでやって、もともと高い評価を受けているのに、信頼を固めて、同盟関係に成功いたします。これで、朝鮮半島の大勢は決したといっていいと思います。

六六〇年、唐と新羅の連合軍が百済の首都、扶余を攻略する。いらした方は分かると思いますが、山の中の山城です。大変綺麗なところですよ。そこが攻略されて、追いつめられた断崖絶壁の下は錦江なんです。そこに高い岩がそそり立っていて、それが落花岩と呼ばれております。もし、この首都が落ちたら、唐は野蠻であり、政府関係者全員を皆殺しにするという風評を新羅が流した様子で、そこでどうせ殺されるのなら、辱めを受ける前に、というので、百済王朝の高官、特に女官たちがその岩の上から次々身を投げたのですね。綺麗なチョゴリ、カラフルなチョゴリで次々に飛び降りるのを対岸から見ていると、まるで花が落ちていくようだ、というので落花岩という名前が今も付いております。日本でいえば、平家の壇ノ浦での滅亡とサイパン島のバンザイ・クリフを合わせたような、百済の滅亡という瞬間を六六〇年に迎えたわけですね。

ところが、さきほどでも笹山先生からお話があったように、その残党による百済再興運動が起こ

り、日本に人質として送っていた余豊璋を返してほしい、彼を中心に国を再建する、ついでには援軍も欲しい。百済は、前から非常に大和に対して操を尽くして、人質を出しただけではなくて、絶えず中国の魅力的な文物も持ってきてくれるし、態度も良いと、愛い奴だと。それに対して、新羅・高句麗も、時々使節を送ってくるけれども、何を言うか、おれの方が偉い、上だ、みたいな姿勢を時に示したりして、けしからんと怒らせたりするわけです。

百済は、日本の軍事的支持がないと三国の中で存続が困難だと思っていますので、日本も丁寧にもいつも大事に扱ったわけです。そのことが効いたとも言えますし、あるいは大和王朝の斉明天皇、中大兄皇子からしますと、この百済再興を成功させて、朝鮮半島への橋頭堡を築くのだ。もし国再興を日本が大軍による援助を行って、お国を再建したならば、事実上わが領域になるじゃないか、というふうな思惑であったかもしれません。二七〇〇〇の大軍を以って、お国再興運動を助けるということにして、斉明天皇も中大兄皇子も大宰府まで、大宰府の近くの朝倉宮で指揮を執る。

ところが行ったところで、天皇が没したので、中大兄皇子が天智天皇になることになります。六六三年、二七〇〇〇という何隻ぐらいの船でこんな大軍を送れるんですかね。教えていただきたい、当時の船で。わかりませんが、ただ五〇〇〇人乗せたとして、六〇〇隻ですかね。大軍を送るのは良いのですが、『日本書紀』によりますと、「日本軍は氣象を知らず」、現地の氣象も知らない、潮の流れ、地形、錦江の入り口辺りだと思われませんが、白村江の状況を良くわきまえずに突入したらしい。

筑紫の方からは、五〇〇〇〇の出兵とかいうのを時々やっていますので、九州方面の人はかな

り氣象も地形も分かつているでしょうね。ところが今度は、天皇のお声がかかり、全国動員で二七〇〇〇人ですから、九州の田舎侍が偉そうなことを言ったら、黙れ、下がれと、天皇の政府の權威を見せつけるのはよいが、相手国の実情に暗く、作戦も立てられなかったんですね。これだけの大軍で行けば、「われら先を争わば、彼まさに自ずから引くべし」と。これだけの大軍で押しかけたら、彼らは蜘蛛の子を散らすように逃げるから、元氣に手柄を上げるべく競って行けと、つまり作戦無しというので、始めちゃったんですね。

唐の方は、唐の偉い將軍を中心に、巨船二隻があつて、そこで作戦會議を開いて、大和の大軍が来たら、やられるふりをして逃げながら、入ってきたところを両側から伏せていた巨艦二隻を中心とする二軍で、両側からばつしと閉めよう。まんまと注文にかかったわけですね。「左右より船を挟みて囲み戦う。須臾之際に艦軍敗れん」という悲惨な敗戦になった。第二次大戦の七つの戦場で、のノモンハンとかミッドウェーとかの敗戦を分析した『失敗の本質』という共同研究がありますが、そのモデルというべき、失敗の本質をこの時にやらかしたわけですね。戦場の実情、敵の戦力・作戦を詳らかにする、策無き精神主義で攻めかかれということで、歴史的な大敗北をやったわけです。

二 敗戦にめざめ、大躍進する大和——防備と学習

(一) 唐・新羅連合軍の来襲を期し、迎撃・防備体制を布く

それでその後が今日のお話であるんですが、かならず唐・新羅の連合軍が攻めてくると覚悟して、先ほど笹山先生のお話にあったとおり、水城・山城・烽火のシステム、通信システムを作り、防人を全国から集めた。というので、大防衛線を引いたわけですね。そのプロセス、先ほどの話で繰り返す必要はないと思います。

もし唐・新羅の連合軍が攻めてくるとしたら、どういう戦をするか、最終的には奈良の、大和の都を占拠することが最終目標ですね。じゃあ、やってきて対馬・壱岐・博多の辺りを通って、そのまま大軍で、何千隻という大軍で、大阪難波津まで行って、難波津から奈良までは、河内平野は短いです。大和側は、生駒山、そこに高安城を作って防備を固めてはおりましたけれども、突破されたらもうお終いですね。それをまっしぐらに行くのか。

しかし攻める側からすると、それはちょっと危ないですね。ずーと戦線が伸びきって、その後ろ側で大宰府あたりから帰り道を突かれたら困りますね。そういう意味じゃ、ステッデイに行こうと思ったら、まず大宰府を落とさなきゃいけない。九州に拠点を作って、ここを支配下に置いておいて、それを中継点にして大和を攻めるというのが無難でしょうね。

有明海を回ってこの鞠智城の辺りをとというのは、この時点ではあんまり考えにくいと思いますね。攻める側がよっぽど余裕がない限り、そして目標をそんなに分散させたら駄目ですから、大和へ行くこうと思ったら、北九州、大宰府を抑え、大宰府を守るために水城、大野城、基肄城を作りました。そこで囲まれて、大宰府が籠城して苦戦している、その時の反抗拠点が鞠智城でしょうね。鞠智城に集積しておいて、兵力と武力を。そこから補給すると。もし万一大宰府が陥落したら、鞠智城ま

で下がって、ここを抵抗拠点にする。六二キロメートル南の鞠智城まで攻め込むというのは大変なことです。特に、最終目標が九州平定じゃないですね。九州制圧ではなくて、大和ですから。その意味では、鞠智城まで唐・新羅の連合軍が攻めてくるというのは、よっぽど大変です。そういう一定の距離を保ったところを反抗拠点にして、大宰府奪還作戦をする、そういう目的で鞠智城が作られたものだと、私は解釈いたします。

攻める側にとって、この日本という国を落すのは難しい。結局モンゴルもどこも成功しなかったわけですが、その一番の要因は割れてこないんですね。日本国内が二手に分かれて、親唐派と親新羅派というのが、中央政府に反発して、分かれてくれたら非常にやりやすいんですね。一部を味方につけて、イギリスがインド、巨大な帝国を支配するに至ったのも、ディバイド・アンド・ルール（分割統治）ですね、彼らが互いに争っている中で、イギリスは一方を使って他方をやつつけさせる。イギリスが北米大陸のインディアンを平定したのもそうですね。イロクワ族という名誉心が強く、勇敢な部族がいる。それを味方にして、銃を渡して、他のインディアンをやっつけさせるんですね。それで片付いたところで、最後イロクワ族をやっつけて、全部取っちゃったんですね。

そういうふうに、割れて味方がいたら良いんですが、この大和国は昔から外国が来た時に結束して燃え上がる。近代のナショナリズム以前から、防人に示されるように、全国から守りがやってくる。というので、抵抗防備をあつめた時代にあんなにも熱心に考えた。天智天皇は、大和では危ないというんで、琵琶湖畔の大津まで都を下げたんですね。これは、戦略的に非常に正しいです。琵琶湖畔まで唐・新羅の連合軍、いかに大軍でも距離の二乗に反比例するという戦力の減少を考えると、

ちよつと来れない。そこまで行けない。ということまでやって防備を考えています。

(二) 唐文明に学び、世界水準を達成―五〇年後に平城京

しかし日本が偉いのは、この防備をしつかりやったこと以上に、唐文明を猛然と白村江の戦いの翌年から学習し始めたことなんです。

当時の世界は、ローマ文明が衰退した後ですから、世界の最高文明は唐文明だったわけです。その最高水準の唐文明を我が物にするというのを遮二無二やったんですね。白村江の敗北の後五〇年で平城京ができる。大宝律令を経て、中央集権国家をしつかりやったわけですね。それができていくプロセスは、強大な外部文明から独立を守りつつ、学習するという二重性が本質でした。

三 日本の外部文明への対応の型

そしてペリーが来た時に屈辱的な開国を強いられた後も、五〇年で、『坂の上の雲』の時代。戦後アメリカに負けた後も八〇年代にはアメリカ・ヨーロッパも工業製品の競争力では敵わないという世界一のもの作り国家に。敗戦の後の跳躍力、学習力というのは、日本史に何度も繰り返されてきた。その元が白村江の戦いであって、そしてその後、懐の深い備え方ですね、大宰府の六二キロメートル南の鞠智城、比較的安全な地で、大野城や基肆城のように単なる山城、兵隊が逃げ込むだけじゃなくて、そこは一つの政治的拠点にもなるような、そういうような鞠智城を作って、多元

的な対応の可能な、そういう拠点を作って、この危機を乗り越えようとしていた。その奥行きの深さというものは、極めて大事であると思います。

おわりに

この鞠智城が特別史跡になるのは当然である。この宝物を評価しない日本の文化行政などはない。国営公園にしていたら、欧米ではそうですけども、芝生の上でよく音楽会を開くんですね。大自然の中のタングウッドなんかは非常に楽しめましたけれども。ここを国営公園にして、古代の文化遺跡、歴史的な所で素晴らしいシンフォニーは、ものすごく似合うんですね。「送り人」で庄内の風景とあの曲とは合いますでしょう？日本の鞠智城もきつとそういう可能性を持っていると思うって、ぜひ国営公園にしていただきたいと思います。どうも長い間御清聴ありがとうございました。